

九州 國立 博物館

Kyushu National Museum

博物館

特別展
台北國立故宮博物院—神品至寶—



慈勝庵コレクション

東洋陶

Fukuoka Oriental Ceramics Museum

磁美術館



特別展

台北 國立故宮博物院 — 神品至宝 —

会期 10月7日(火)～11月30日(日)

九州国立博物館

14日間 限定公開!

展示期間

10/7(火)～
10/20(月)

展示期間中は無休
毎日公開



肉形石

清時代・十八～十九世紀

石材の縞目を活かして肉の赤身と脂身に見立て、染色技法を駆使してタレが染みた角煮の皮を表現する。選び抜いた素材と職人の高い技術が融合した、究極の「神品」である。北宋時代の文人・蘇軾(蘇東坡)の名を冠して「東坡肉」とも呼ばれるこの豚の角煮は、皇帝が居住して日常の政務を執り行う紫禁城の養心殿で鑑賞されていた。

國立故宮博物院とは

かつて中国の皇帝が所蔵していた文物を数多く収める世界的な博物館です。所蔵品はおよそ七〇万件、年間の来場者数は約四百万人を数えます。二〇一五年には台湾南部の嘉義県に分院が開院される予定です。

故宮博物院は、一九二五年、清王朝のラストエンペラー・溥儀が退去した後の紫禁城に誕生しました。その後、文物は国際情勢の変化や内戦のあおりを受けて移動を余儀なくされ、最終的にその一部は台湾に渡りました。一九六五年、台北市郊外に展示施設が建設されて以降は、特別展を中心とした多彩な活動が全世界の注目を集めています。

その所蔵品は、中国の歴代皇帝たちが選び抜いた、まさに文明の精華です。皇帝の至宝を受け継ぐ故宮のコレクションは、まさに中国文明の"神髄"そのものであると評することができるのです。



年間400万人が故宮へ見に来る、 門外不出の「神品」を期間限定公開！

展示期間
10/21(火)～
11/30(日)

ひとくま 人と熊

清時代・十八～十九世紀

天然の玉材の色をそのまま活かし、白い部分に人物を、黒い部分に熊を彫り分ける。その愛らしい体つきや語りかけてくるような笑顔から、いかに中国の玉器が豊かな個性をもったかを実感できる。「白菜」「肉」に続くこの故宮の人気者も、かつて養心殿に伝来した。きっと皇帝の心を和ませていたに違いない。



展示期間

10/21(火)～
11/30(日)

華燈侍宴図軸 馬遠筆

南宋時代・十二～十三世紀

旧暦一月十五日の元宵節に天帝をまつる宮中の「華燈」の儀式を描く。微かな燈火、沈みゆく夕日、そして柔らかに輝く満月が交錯する、黄昏どきの微妙な光線のドラマを鋭敏な感覚で表わす。作者の馬遠は南宋宮廷絵画の第一人者であり、本図はその最も優れた作品である。上方には彼のパトロンであった楊妹子(寧宗皇帝の皇后)が賛をよせる。



散氏盤

西周時代・前九～前八世紀

水を入れる手洗いの容器の形をした青銅器である。内側の銘文に、西周時代に起きた散という小国の領地争いの顛末を記した、政治的な意味あいをもつ公文書のような器物である。北宋時代以降、士大夫たちは理想的な統治が行われた中国古代の王朝につよい憧れを抱き、この時代の青銅器を珍重した。本品は故宮の青銅器のなかでもっとも有名なものの一つで、丸みある篆書の字形に特徴があることから、日本では書道の教科書にも掲載される重要な文物である。





ふん さい すかし ぼり
粉彩透彫
うん りゅう もん かん か
雲龍文冠架
けい とく ちん しょう
景德鎮窯

清時代・乾隆年間(一七三六～一七九五)

雲を背にして自由に泳ぎまわる龍をデザインした華やかな色づかいの磁器である。その全体は、四つの部位、すなわち上から球体、軸柱、透彫りの部分と底部を組み合わせている。その装飾も、透彫りや、「粉彩」と呼ばれる七宝の技術にもとづく美しい絵付け、金彩などを駆使する。想像を絶する手間ひまをかけた景德鎮官窯の逸品である。

しょう ちく ばい しか
松竹梅鹿
ついで しゅ ちよう ほう ばんこ
堆朱長方箱

明時代・十六～十七世紀

五十頭の鹿の群れを松竹や太湖石などととも表わす。鹿は長寿の仙獣であり、また音が「禄」に通じて仕官を意味することから、一族の繁栄を願うお目出度いテーマとして好まれた。塗り重ねた朱漆を彫り込む堆朱の技法を用いて、細部まで丁寧に文様を表わす本品は、明時代の技術の高さをよく示している。



らん じ びよう きん ふん さい
 藍地描金粉彩
 ゆう ぎょ もん かい てん へい
 游魚文回転瓶
 けい とく ちん しよう
 景德鎮窯

清時代・乾隆年間(一七三六～一七九五)

四つの部位からなる複雑な構造の瓶である。頸と連結された内側の部分が回転すると、胴部の窓から水中に泳ぐ愛らしい金魚が現れる仕組みになっている。このような回転瓶は、皇帝の命を受けた官吏が景德鎮官窯で苦心して作り上げた成果である。この趣向を凝らした超絶技巧の器にも、乾隆帝の美に対するつよい意向を読み取ることができる。



せい じ りん か わん
 青磁輪花碗
 じや とう
 汝窯

北宋時代・十一～十二世紀

北宋の宮廷のためだけに制作されたと考えられている汝窯の名品。南宋時代にはすでに入手困難とされた汝窯は、今日でも約七十点しか現存しないが、本品はそのもっとも優れた作品の一つである。その穏やかで大らかな姿形や、柔らかく深みのある釉薬の色調には、この時代の皇帝の美意識が反映されている。



紫檀多宝格

清時代・乾隆年間(一七三六～一七九五)

多宝格とは、皇帝が手元に置いて鑑賞した宝箱である。箱の内部には小さな陳列棚があり、そこにフィギュアのような小さな玉器や磁器などが隙間なく整然と収められている。この可愛いミニチュアのなかには、なんと古代の青銅器から清時代の象牙彫刻までもが含まれている。その器物の時代とジャンルの幅広さは、さながら皇帝コレクションの縮図である。本品には乾隆帝が愛玩したとの説がある。

九州国立博物館

福岡県太宰府市石坂4-7-2(太宰府天満宮横)
NTT ハローダイヤル 050-5542-8600
(午前8時～午後10時／年中無休)

■ 観覧料／一般1,600円(1,400円)、高大生900円
(700円)、小中生400円(200円)

※()内は前売りおよび団体料金(20名以上の場合)。
※上記料金で九州国立博物館「文化交流展(平常展)」も
ご覧いただけます。

■ 開館時間／午前9時30分～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

■ 休館日／10月27日(月)、11月4日(火)、
11月10日(月)、11月17日(月)

■ 会場／九州国立博物館 3階 特別展示室

■ 交通／西鉄電車太宰府駅より徒歩で約10分

■ H P／<http://www.kyuhaku.jp>



作品はすべて國立故宮博物院所蔵

開館十五周年【特別展示】

中国陶磁八千年の至宝
世界が絶賛した

唐三彩

会期：10月1日〔水〕～12月20日〔土〕

「福岡東洋陶磁美術館」の館長・溝口虎彦氏のコレクションは、平成6年「福岡市博物館」で初めて一般公開され、予想を上回る大きな反響がありました。その後、平成11年に東洋陶磁美術を専門に展示する市内で唯一の私立美術館として創設されました。

今回、開館15周年を記念して、コレクションの中から、中国陶磁「唐三彩」を中心に選りすぐりの名品を公開します。八千年を超える長い歴史を持つ中国陶磁は世界の国々の陶芸史上に、ひととき光彩を放っています。この機会にぜひ、心ゆくまで中国陶磁の世界をご堪能ください。

福岡東洋陶磁美術館 館長 溝口 虎彦



さん さい うま
三彩馬
唐時代(8世紀前半)



三彩印花蓮華文 三足盤

唐時代(8世紀前半)

蓮華の宝相華を見込み中心に、その回りから茎の長い荷葉が8本、放射状に開いて大きな団花の形をなしている。その茎と茎の間には、瓜の様な形の開きそうな蕾と閉じた蕾が交互に配し同心円的に飾っている。その外を唐時代の独特の、蠟抜きの斑紋で飾った、盛唐期の華やかな唐三彩三足盤である。印花の型押し文を施した後、一度素焼きしてから、三彩釉を掛け焼成した様である。底は卵白色のきめの細かい胎土が見られる。

唐三彩とは?

中国の唐時代に王侯貴族の美術品、副葬品としてつくられ、白、緑、褐色等、鮮やかな彩色が施されている。美しさの成熟度は飛躍的なものがあり、その典雅な美しさは、古今東西の陶芸の精粹という評価が与えられている。



三彩貼花文甗

唐時代(8世紀前半)

甗とは、足のついた鍋のことで、この器をもって調理道具としていたことに基づく。唐三彩では、轆轤をつかって優美な形につくり、三足の足は型をつかって獣脚につくる。総体に厚手のつくりで荘重感をもたらし、胴には型押し文様を貼りつけている。貼花文とは、この貼り付け技法による文様という意味である。蠟抜き技法によって鹿の子斑に白い点斑文をこまかく表わして三彩の釉法にさらなる深遠な気風をうながしている。



さん さい ふ じん よう 三彩婦人俑

盛唐時代(8世紀前半)

髪を頭上に盛り上げるファッションは開元年間(713~741)の前半に長安や洛陽の都ではやった風習であった。そして西域から伝った衣裳を身につけて佇む若い女性。その可憐な姿の女性は貴族に仕える女性であろうか。素地は華北地方独特の純白の陶胎で、その柔らかな風趣が女性のうるわしさを内側からささえている。



か さい き ふ じん よう 加彩貴婦人俑

唐時代(8世紀中葉)

楊貴妃とのラブロマンスで有名な玄宗皇帝(在位712~755)の後半生をしめくる天宝年間(742~755)は、この婦人俑のように、髪を大きく結い、ゆったりとした衣をまとった豊満な体軀の女性像こそ、夢のように美しい姿の女性とあがめられていた。もとは加彩が加わっており、いまも面貌にはその跡をとどめている。



か さい き ふ じん よう 加彩貴婦人俑

唐時代(8世紀中葉)

手の先に鷹を留まらせて粹に佇むポーズをとってみせる貴婦人俑。その髪のかき方もまた、派手で目を引く。その容貌は太り目で、ふくよか。素地には赤焼きの土器がつかわれ、白土を化粧して、頬には紅を差して艶っぽい。



三彩駱駝

唐時代(8世紀前半)

三彩駱駝。ゴビ砂漠を中心に生息する駱駝は二瘤駱駝のため、中国の唐時代に描かれた三彩の駱駝も必ず二瘤となっている。飾り立てられて、つんとすましたラクダのおどけた表情が素朴なポーズ取りと奇妙な対比を見せる。

三彩鎮墓獸

唐時代(8世紀前半)

獣体に人頭をもった鎮墓獸。墓の守り神であり、2体1対をなして墓の内陣の入口に置かれる。この作品は8世紀初頭の作と推測される大作で、三彩の呈発もすばらしく、造形力も冴え、三彩鎮墓獸の力作といえる。





黄地緑彩雲龍文陶板

景德鎮官窯
明時代 正徳年間(16世紀)

明永楽帝時代に南京に建立され、1856年の太平天国の乱で破壊された宮殿の陶板。同種のものがロンドンのパーシヴァル・デイヴィッド財団、ヴィクトリア・アルバート博物館に現存する。渦巻き模様の雲の間で宝珠を追う二頭の龍は鮮やかで圧倒的な迫力がある。

五彩宝相華 唐草文瓢瓶

景德鎮官窯
明時代後期(16世紀中葉)

中国の吉祥趣味をよくあらわす瓢の大瓶であり、俗に雑彩とよばれる官窯五彩磁のなかでは大作に属す名作。雑彩とは、上絵付を器表に限なく塗りつめ、時には上絵具のうえに、更に上絵具をのせる二重絵付を行う手法を指し、各種の作風があるが、この作品は、赤絵具で主文様を描き、余白を緑彩で塗りつめる緑地紅彩に属している。一見すると官窯の精緻さとは遠いように映るが、嘉靖(1522~66)官窯には、民窯の委託焼造が活発化し、結果としてこのような生き生きとした庶民のエネルギーが投影している。





青花葡萄文大盤

景德鎮官窯 明時代(15世紀前半)

永楽帝(治世1403-24)時代、官窯には白磁を御器と指定していたが、かつて文化人には人気のなかった青花(染付)も、特例に技・材料を吟味させて、美しい様式を完成させた。この大盤は、潤いみちた釉下に、ふくよかな風韻をかなでる葡萄文・花卉唐草文・波濤文が、調和をもってみごとに描かれている。

福岡東洋陶磁美術館

福岡市城南区七隈8-7-42

TEL 092-861-0054

■入 場 料／ 一般800円・学生400円・団体割引500円・
シルバー割引400円(65才以上)

■開館時間／ 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休 館 日／ 日曜・祝祭日・年末年始・その他、臨時休館日あり

■休 館 月／ 8月・2月(展示入れ替えの為)

■入館無料の／ 敬老の日(9月の第3日曜)・文化の日(11月3日)・
お知らせ 福岡大学創立記念日(5月21日)

■交 通／ 地下鉄七隈線七隈駅1番出入口から徒歩1分

■H P／ <http://www.aa.alles.or.jp/~tora/>

